

涅槃、本当に生きることが できる場所に立つ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」を再開した（新型コロナウイルス感染症の流行により2020年3月～22年1月まで休講）。本講座は引き続き、「浄土を求めさせたもの一『大無量寿経』を読む一」のテーマのもと、当センター所長・本多弘之が問題提起を行っていく。ここでは、この2月に再開された第130回（オンライン開催）から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

久しぶりにこうしてお話をさせていただく機会が与えられました。前回から随分と時間がたっておりますから、いままでにどういう話の展開があったのかを少し確認したいと思います。

『大無量寿経』のいわゆる三毒段に入る前に、「必ず超絶して去ることを得て、安養国に往生せよ。横に五悪趣を截りて、悪趣自然に閉じん」（東本願寺出版『真宗聖典』57頁〔以下、『聖典』〕）とあります。そのように言われているのにもかかわらず、その続きには、「然るに世人、薄俗にして共に不急の事を諍う」（『聖典』58頁）という形で三毒段に入って行くわけです。それは、この世の事はどれだけ人間が努力しようとも悪業が尽きない、そういう我々の限界性が三毒段、五悪段という形で徹底的に教えられているのです。そして、「窃窃冥冥として別離久しく長し。道路同じからずして会い見ること期なし」（『聖典』60頁）。人生を終えていく時には、一切と別れていってしまうのだと。そういう人生の在り方に対して、「修善を勤めて精進して度世を願え」（同上）と。「度世」というのは、この世を超える。この世に埋没する形で、「不急の事」、やらないでもいい事に一生懸命になってしまう。自分の与えられた人生、与えられている本当の意味もよくわからなくなってしまう。そういう事態にはたと気づいて、「不

急の事」を本当に超えていく方向を願えと。

そこから、「それ心を至して安楽国に生まれんと願ずることある者は智慧明達し功德殊勝なることを得べし」（『聖典』63頁）と。安楽国の問題がここでもう一度確認される。つまり、三毒・五悪段が説き出される前に願生の教えが言われ、そしてその真ん中にも願生の教えが言われる。本当に法蔵菩薩がご苦労くださって作り上げた安楽国というものは、実は、仏陀が求めて明らかにしようとする本来の静けさの世界である。これをニルヴァーナ、涅槃と言う。涅槃とは、一切衆生が平等に、本当にその静けさに生きることができるよう、そういう在り方を言うのだと。親鸞聖人は、涅槃や一如などという本来の静けさの世界から願心が立ち上がったのだと、法蔵菩薩は一如宝海から立ち上がったのであると言われていています。そして、我々は浄土に生まれたいと願えという教えを受け止める時に、涅槃に帰れという願心を聞くのだと。涅槃に帰れということは、静けさに帰るといようなことでしかないのだけれど、それは本当に生きることが出来る場所に立つということなのだ親鸞聖人は明らかにしてくださっています。

その先に進むと、「今仏に値うことを得て、また無量寿仏の声を聞いて歓喜せざるものなし」（『聖典』64頁）とある。この教えは「今」という問題をもっているわけです。この世の苦悩に虐げられているだけではなくて、この世の苦悩の在り方を横さまに截る願力に随って、本当にこの世の命を生き直す。単にこの世の命に生きるのではなくて、この世の命を超えるようなはたらきに触れるのだと。そのことが見えないと、私たちは、この世の事にかかずらって命が尽きてしまう。そうした、まさに三毒五悪段をそのまま生きているような人間でしかないという問題があるわけです。